

雪	雪	着	鉾	雪	雪	豊
ŧ	に	雪	杉	L	L	潅響 田
B.		林		づ	an a	集
を	灯	白	P	れ	づ	都
脱	す	日	_	40	り	そ の 峰
	,			誘	さ	ジ テキ
げ	茅	V)	陣	\mathcal{O}	C	三十
ば		کے		O	そ	<u>'</u>
全	葺	つ	<u>-</u>	誘	Ś	
景	村	上	陣	は	.,	
	J 1		177	れ	旭	
妙	は	げ	\mathcal{O}	ĄU	_	
高		ゐ		峠	Ø	
な	山	た	雪	越	峠	
る	麓	ŋ	煙	ゆ	越	

ま 風 野 春 春 雨 踏 わ た 寒 水 絵 た 末 信 寒 Ł P な < \mathcal{O} 子 を لح う り 日 \mathcal{O} 明 12 拾 ど لح ま 7 窓 Ł 日 雪 5 لح S を ど \mathcal{O} め ま 後 り 座 林 0 t 山 で \mathcal{O} 頁 7 لح に 野 ŧ 月 \mathcal{O} \mathcal{O} を す 海 12 \mathcal{O} を ま ŋ 書 る 身 青 あ め た 出 風 内 カゝ る 蜷 拾 信 三 妙 \mathcal{O} لح り 道 き 12 子 5 す 高 **つ**

丸山佳子 南 天

青	左	片	世	を
雲	右	想	が	ど
	左	ひ	変	
の	と	ば	は	L
心	夜	か	る	銃
で	明	り	人	鞄
		さ	差	, _
今	の	せ	す	_
は	窓	7	指	つ
実	に	る	0)	を
	春	実	先	
南	の	南	に	私
天	風	天	春	に

秀華採集

枯原の真ン中に集る象の耳

伊藤希眸

外であるが、 自 然を聞き入る。 地球規模になると意外ではなくなる。このような中に詩が生まれ まして「枯原」となればひとしおである。 「象の耳」 とは る 意

念入りに鎌のさびどめ山眠る

懐手男の

死角見てしまふ

のである。

仲 井 タミ江

杉井真由

美

後句 前 0 句 \mathcal{O} 「懐手」は一歩下がった視野 眠 る」の在 り方は よい。 であるので、 Ш も単 に眠 っているのではないということ。 広くまた深いものまでが見えて

しまう。

Щ 頂 0) 背 伸 び L 7 み る 春 0)

月

鈴 鹿

合

言

葉

風

と

雲

と

L

春

動

<

猟

犬

0)

お

ほ

き

な

鈴

B

平

家

谷

平

家

谷

合

言

葉

近

蝌

蚪

生

る

小

さ

き

鼓

動

は

唄

と

な

り

清

盛

を

呼

び

捨

7

海

鼠

穾

<

男

大

琵

琶

0)

風

0)

さ

さや

き

水

仙

忌

煤

逃

げ

0)

漢

携

帯

電

話

嗚

る

水

仙

B

い

<

り

0)

海

来

7

Ç

と

り

ど

詠

h ど 爆 づ 谷 深 々 と 平 家 谷

どんど火に頬を焦が L て平家 0) 子

和 田

PDF= 俳誌の salon



数入病大介 の院棟晦助病 子者に日浴院 とき患っなりませる。 病へばとに 院らきと跳 食れきもぶ にたほにな北 加るるそり へ日夜を大 らののな晦

三三初山た 面寸暦国な笹 鏡の先はび み影づ水けっ んも剥むがるたっ p あ ぐ め ま た め 意た紙か洩 去か兜笹れ岡 年福太子四紫 今寿の鳴温 負るえすす 青 年草句く晴水 れ出鐘す日朗

> 大犬雪い塩 春高虹春花 寒のにのの ゆ僧色霞の花 の 尾酒ち濃 くにのむ城 のの男の男の やな やな空か明篝 水温は還ぎ 湯氣を,,日 のもよる鮭 のさ探し決 器りろも北き Ш かをこの海た 石らしが戦 も を を を を を を の 服 をさに山のの 香 き で が 聞 都 都 れ葱石を篝 し坊鹸戀焚示 滋のた銀っ『 賀瞳し河ゆ史 人主玉ふく虹

凍寒切生玄 つき札き米 る夜をるの 日を見と を紙せはや B なので演う し技な き薄もさ ま ⁶っす顔 のでたるし松 に老いてをあとってとってといってといってといってものという。 のての風冬都 自ゐ冷花耕

雪葬雪雪母 激れ原林の雪 しっをのや 生のは軋転を すっつはまれ るとなるといるといっています。 飲雪来き降 るむふをし美



ミ吊使猿ジ 餅屠切臍初 ユ籠ひはコを 花蘇りの御餅 シャのおり の気餅緒っ のオガなラー待 や分のの一 が閻豆古霊花 て魔のび中 艀の半し佛 化口身真の丸はの綿笛は る渇み年世井十き焦明を一 四きがく聴巴 日るするき水

春春立豆宅 立め春ま配 ちゃって 痛されて 空類気電 に福言 に福言 少し雨でなが 減の^まとへた つつ套こにき り朝るにてま

そ雪一海 を あり と ろりと み 屋 三 部 屋 三 大シ帚ネ初 旦べ星オ日

とり焼ンの

日尽度い

が輪とるかり

鳥月鳥の の風いまるの風がいまる。

を 分 ^ね 天 て

るつる川れ寛

切かむのく

め治伊獅夢 めっち 一伊勢やワイン がかった。 かかの金が に礼一歯ン 土冴直角ツ 神ゆ線いド塩 風るに陽の 善男はをなる 初た来じ追朱 雀りるくふ千

あ宇初舞初



豊 田 都

千 葉 伊藤 希眸 冬萌や突破口まだ見えぬまま

割れ石に億年の貌風花舞ふ

呑めぬ身のときには悔し冬銀河 尺の鯛の胸びれ年迎ふ

枯原の真ン中に集る象の耳

観覧車家族と過ごす三ヶ日 懐手たぐり寄せてる記憶かな

ジエツト機を子に見せたくて冬の午後

アリゾナ

伊吹

之博

冬休み父に初めて勝将棋 ローソクを消した匂ひやクリスマス 屠蘇膳に先祖の思ひ溢れ来る

酒 田

藤波

松山

京

都

仲井タミ江

かまくらを作る楽しみ男の子

雪掻棒随所に動く駐車場 雪落ちて防風ネツト揺らしけり

冬萌や意地のひとつを捨てきれず

懐手男の死角見てしまふ

高

槻

杉井真由美

尾根風のきのふとちがふ葱囲ふ 背合はせに住む狐狸の声毛糸編む 念入りに鎌のさびどめ山眠る よろづ屋の一灯ひくし一葉忌

PDF= 俳誌の salon

峰

選

音いたま 連 高野 佐々 本株 神田 本株 松 春子 知 A
高 佐 直 河 神 東野 夕 江 内 田
野 女 江 内 田 木 秋 教 数 茄 春 紗 谷 大 力 五 子 知 子 人 介 子
学 知 学 资 学
山河あり今再生の初あかり 冬晴れやスカイツリーはじまんげに 冬晴れやスカイツリーはじまんげに ひとり居の気楽さ言はれ師走くる 橋を這ふ貨物列車に寒の月 ごほごほと主治医に憑きし風邪の神 初稽古みがかれし床音符とぶ 機梅や離れ家へ下駄の音軽く 生命の起源は白し初日射す 十二月暇を余して鍋研く 十二月暇を余して鍋研く 十二月暇を余して鍋研く 中空に月食といふドラマ見る 薬空に月食といふドラマ見る 草鳴きの庭の隠れ所方二寸 で開きの庭の隠れ所方二寸 単線路汽笛のこして山眠る 句帳手に風呂吹き大根煮てをりぬ 句帳手に風呂吹き大根煮てをりぬ
習 志 野 <i>安</i>
上 岡 児 安 布 野 山 王 田 川
紫 敦 有 一 孝 泉 子 希 郎 子